

Research Note

研究ノート

スポーツ推薦入学生クラスにおけるアクション・リサーチ —授業改善による学習姿勢の変化—

牧 野 眞 貴

要旨 近年、大学入試制度の変容により、英語嫌いの学生が、英語を勉強せずに入学することが可能になってきた。英語への苦手意識をあらわにする学生を強制的に授業に参加させることは、教師・学生双方にとって苦痛であり、学生の英語嫌いを助長することになる。本研究では、英語が苦手な学生を対象としてアクション・リサーチを行い、教師が授業を振り返り、学生の英語力やクラスの特徴に合うよう指導法を見直すことによって、学生の学習姿勢を改善することを目的とした。まず授業における問題点を整理し、指導の過程で学生が自ら授業に参加したいと思うような工夫を凝らし、動機づけを高める励ましのフィードバックを与えた。結果、学生の学習姿勢が大きく改善し、自ら進んで課題に取り組むようになった。アクション・リサーチは、授業の質を高めることを目指す教師にとって非常に有効な研究手法であり、教師と学生の信頼関係構築にも大きく貢献する手段であると言える。

キーワード：アクション・リサーチ、教師、授業、内省、学習姿勢

Action Research to Promote a Positive Learning Attitude: A Case Study of a Sports-Recommended Sophomore Class

Masaki Makino

Abstract In recent years, a change in university entrance system has allowed students who do not like English and have not studied it to enroll at universities. At university, however, students are forced to take English classes, which are a burden on both teachers and students, and which increase students' loathing for the English language. This study was undertaken to promote a positive learning attitude in sports-recommended students reluctant to learn English. The author modified the lesson plans to meet students' English abilities and characteristic profiles through an action research. She considered the problems confronting the students and then came up with various ideas and solutions, and further provided encouragement to motivate students. As a result, students participated enthusiastically and demonstrated a positive attitude toward English learning. Action research was shown to be an effective method for the teachers who are attempting to raise the quality of learning in a class, and it also contributes to creating a strong relationship between teachers and students.

Keywords: action research, teacher, class, reflection, learning attitude

1. はじめに

スポーツ推薦入試制度で入学した学生たちは、入学試験に英語を必要としないため、概して英語が苦手である。中学初期レベルで英語力が止まってしまったという学生も少なくない。そのような学生が集まりクラスを編成する場合、授業の開始とともに英語に嫌悪感を示す、わからないので私語をする、といったことに加えて練習での疲れを見せるなど、一般生のクラスと雰囲気が大きく異なる。牧野（2010 a）では、そのような学生たちを対象にアクティビティを取り入れた授業を行い、結果として学生は「英語が苦手」から「英語が好き」になった。2010年度前期コミュニケーション・イングリッシュ・SPORTS 1も前年度と同じ授業法で臨んだが、学生の学習態度が大きく違う上に、クラス内の人間関係が二分化し対立傾向にあったため、全員で一つになってアクティビティに取り組むことが困難であった。新学期早々に授業法を見直すため、アクション・リサーチを行い、授業の改善を図った。その中で最も力を注いだのは、学生の学習意欲を向上させる取り組みであり、「強制されて授業を受ける」から「自ら授業に参加したい」と学習姿勢が変化することを目指した。

2. 学習意欲について

多くの教師が抱える課題は「学生の学習意欲をどのように向上させるか」ではないであろうか。英語が苦手な学生は、授業に対する意欲が低いことが多く、「英語がわからない」といった不安がより一層意欲を低下させるであろう。そのような学生の学習意欲を向上させるためには、教材、授業法など様々な工夫が必要であるが、まずは教師の働きかけが重要ではないか。佐野（2005）は、学習意欲向上には、個々の生徒理解が重要とし、生徒の提出物に目を通し、励ましのフィードバックを与えれば、生徒は教師が自分を認めてくれたと感じ、親近感を持つようになるとしている。小野瀬（2004）は、自分がまわりの友達や教師、父母から認められ、受け入れられたと感じる「他者受容感」が生徒の意欲を向上させるとしており、教師と学生の信頼関係構築が重要となる。

また、学習意欲の向上には学生に「自信を持たせる」ことも必要ではないか。都築（2004）は教師が生徒に自信を持たせるアプローチとして、1）誰もがあるがままの自分を受け入れ、自信を持つことができるという信念を生徒に伝えること、2）他のクラスメートと比較しながら「相対評価」で生徒を見るのではなく、いわば「絶対評価」で各人の長所や強みを見出し、本人にフィードバックすること、3）成績などの限られた基準で生徒を見るのではなく、多面的な基準を用いて生徒を把握すること、4）気持ちのこもった褒め言葉をかけること、5）「ほめる」よりむしろ「聞く」ことによって、教師が生徒を受容していることが伝わる場合も多い、を挙げている。このような自信を持たせる教師の働きかけも、教師と学生の関係を構築するものであり、学習意欲を向上させると言えよう。

3. アクション・リサーチとは

アクション・リサーチ（AR）とは教員が researcher の役割をあわせもち、計画—実行—内省というプロセスを経て、授業改善を目指す質的研究手法で教授力を高める手段である（三上、2006）。授業で何か問題に気づいたら、実態の把握と原因の究明に努め、対策を講じて実践し、結果を検証して解決を目指すものであり（佐野、2005）、そのプロセスは以下のとおりである。

- 1) 問題の発見：直面している事態から扱う問題を発見する。
- 2) 事前調査：選んだ問題点に関する実態を調査する。
- 3) リサーチ・クエスションの設定：調査結果から研究を方向づける。
- 4) 仮説の設定：方向性に沿って、具体的な問題解決の対策を立てる。
- 5) 計画の実践：対策を実践し、経過を記録する。
- 6) 結果の検証：対策の効果を検証し、必要なら対策を変更する。
- 7) 報告：実践を振り返り、一応の結論を出して報告する。（佐野 2005、p.6）

三上（2006）は授業の内省を、教師が学習者のタイプやレベル、ニーズなどの学習者要因と基礎となる理念や原則を考慮して、授業を計画・実施し、その後その結果を観察・分析し、問題点を明らかにし、改善を加えていくという一連のプロセスの核となる活動とし、リフレクションを通じて、教師の行動の根底にある信念を自覚させることが教師の専門的成長に不可欠であると述べている。

4. AR 先行研究

近年 AR は授業力向上を目指す教員から注目を浴びている研究手法で、自分の授業を振り返るといった客観性が、指導力向上につながっている。関田（2003）は AR により教師と生徒間、および生徒同士のインタラクションの変化を分析したが、教師が生徒のありのままの姿を評価し、両者が抱える問題を解消することで、より質の高い授業や学習が可能になったとしている。また、教師、生徒両者が問題解決に協力して取り組むことによって、人と人のきずなが形成できるとも述べている。上田ら（2006）は、最下位クラスの英語嫌いの学生たちの視点を変えさせる目的で AR を行い、結果学生たちの内発的動機づけが高まり、70%弱が入学前に比べて英語授業に対して肯定的イメージを持つようになり、プレイスメント・テストの結果も文法力を中心に上昇するという結果を得た。Lafaye（2007）は、英作文クラスにおいて AR を行い、作文能力を向上させただけでなく、従来の作文指導法よりも学生の意欲を向上させることができたとしている。津田（2007）は、AR の導入により、学生の一般的な英語能力、および作文能力を向上させる試みを行い、その課

題であった50語作文に多くの学生が興味を持ち刺激を受けたとし、AR による予期せぬ収穫として、学生が書く作文により学生が何を考えているか、何に興味を持っているかを知ることができたことを挙げている。そして AR 手法を他の授業にも応用可能とし、ファカルティー・ディベロップメントの一つの方法として有効だとしている。田中（2007）は、英語力の格差の大きいクラスにおいて4技能を伸ばす目的でARを行い、それぞれのレベルで効果を上げた。牧野（2010b）は、リスニングに苦手意識を持つ学生を対象にARを行い、洋楽をリスニング活動のウォーミング・アップとすることで、学生のリスニングに対する意識を変化させた。

これら全ての先行研究では、教師の授業リフレクションが学生の学習意欲や、授業への興味を高め、AR が非常に効果的な研究手法であるとしている。以下はその1例である。

最新の理論を実践して、よりよい教育を行うということは大切なことである。しかし、理論と実践は教育の現場ではギャップがあることも見受けられる。そのため、AR は良識のある教師にとって、今後ますます重要性を増してくると思われる。特に、「役に立たない」と常に批判にさらされてきた日本の学校での英語教育は、AR を実践していくことによって、変わっていきけるのではないかと考えている。最近、大学生の英語力がどんどん低下しているという声を聞くが、それだからこそ、学生と一緒にって授業を作り上げて、この授業は有益であったと学生に言われるものにしたい。AR はそのための重要な要素である。（田中 2007、p. 112）

AR は、理想的な授業や教育環境が全て整った形でどこか別の場所に存在すると考えるのではなく、教師自身が問題意識を高く持って自分の授業実践を観察・分析し、それに繰り返し改善を加えていくことによって、理想的な授業を次第に作り上げていく（三上、2000）。つまり、授業がうまくいかない理由を学生に転嫁するものではなく、教師が学生を変えようと努力することであり、教師と学生の人間関係構築につながる研究手法である。

5. 本研究の目的

本研究ではスポーツ推薦入学生クラス（コミュニケーション・イングリッシュ・Sports 1）においてアクション・リサーチを行い、授業改善や教師の働きかけにより、学生が積極的に授業参加するよう学習姿勢を変化させることを目的とする。

6. アクション・リサーチ実践

6.1 アクション・リサーチ対象授業

今回コミュニケーション・イングリッシュ・Sports 1（CES 1）においてアクション・

リサーチを行った。この授業は、スポーツ推薦入試制度で入学した学生に、競技生活と学業生活の両立を実現し、かつ卒業後に有益な知識がつくよう設けられたスポーツ副専攻という特別プログラムの一つであり、2年生の選択必修科目である。学生たちはこれ以外に、英語教養科目3科目履修しており、合わせて週に4時間英語を学ぶことになる。

① 授業概要・方法等

この授業では、外国でのコミュニケーションをテーマとし、アクティビティを中心に英語に慣れ、英語で自己表現するスキルを身につける。また、さまざまな場面での実践練習も取り入れ、英語表現だけではなく、外国でのマナーや文化についても学ぶ。

② 学習・教育目標および到達目標

- ・海外に遠征した時に外国の選手たちと簡単な会話ができるようになる。
- ・英語に合わせたジェスチャーや感情表現ができるようになる。
- ・外国でのマナーや、異文化知識を身につける。

6.2 問題の発見

2010年度前期CES1クラスでは、開講早々学生の授業態度に驚いた。筆者が前で話をしても、大きな声で私語をする、ふざけあう、中には小学生のようにお互いをたたき合うといった光景が見られ、騒ぎを収めるのに筆者が声を荒げる場面もあった。また、授業中平気で居眠りをする学生も少なくはなく、注意をすると、「寝てはいけないのか」と聞き返され、筆者の指導が厳しいと反論された。授業では、前年度と同じくアクティビティを取り入れたスポーツ学生らしい活発な取り組みを試みたが、騒ぎがより一層大きくなり、収集がつかなくなった上に、2分化していたクラスが、グループ間で競うことでその対立がより深くなる結果となった。授業を進める中で一番の問題点は、大半の学生が「英語がわからない」を口にし、授業に真剣に取り組めないことを訴えたことであった。

このような状況では、学生を授業に集中させることは困難であると判断し、佐野（2005）のARプロセスに基づいて、学生の学習姿勢を改善するためのアクション・リサーチを行うことにした。

6.3 事前調査

まず、学生にアンケート調査を実施し、英語に対する苦手意識や英語力を把握した（表1、2）。これらより、学生の多くは圧倒的に英語が苦手であるが、英語に対してはそれほど嫌悪感を持っていないことがわかった。

表1 英語力自己評価 (n=24)	%
得意	0.0
どちらかといえば得意	8.3
どちらでもない	16.7
どちらかといえば苦手	33.3
苦手	41.7

表2 英語に対する意識 (n=24)	%
好き	4.2
どちらかといえば好き	12.5
どちらでもない	54.2
どちらかといえば嫌い	12.5
嫌い	16.7

6.4 リサーチ・クエスチョン

授業改善に向け、問題を整理し、リサーチ・クエスチョンを以下の4つに設定した。

1. 教師に強要される授業ではなく、彼らが自発的に取り組める授業はどのようなものか。
2. 授業中静かにさせるためには、集中できる活動が必要ではないか。
3. 自分にもできると思えるような内容に取り組ませるべきではないか。
4. 教師が励ますことで、学習意欲が向上するのではないか。

6.5 仮説の設定

図1はドルニエイの動機づけを高める指導実践モデルである。動機づけの基礎的な環境の創造、学習開始時期の動機づけの喚起、動機づけの意義と保護、肯定的な追観自己評価の促進の4つのカテゴリーそれぞれに具体的な提案がなされている。これら全ては筆者が直面している問題に効果を奏すると考えられるので、授業改善のモデルとし、前述のリサーチ・クエスチョンを踏まえ、以下の仮説を設定した。

仮説1：教科書を理解するためのプリントを教師が作成すれば、授業内容が理解できるのでまじめにそれに取り組むだろう。

仮説2：辞書で単語の意味を毎週調べさせ、授業最後にテストをすることで、授業中に単語を覚え、やればできるという達成感を味わうだろう。

仮説3：毎週英語を発表する機会を設ければ、授業内にしっかり練習し、発表を繰り返すことで、英語を話すことに自信がつくだろう。

仮説4：毎週プリントを回収し、教師が添削してコメントを付けて返却することによって、教師の励ましに刺激され、学習意欲が向上するだろう。

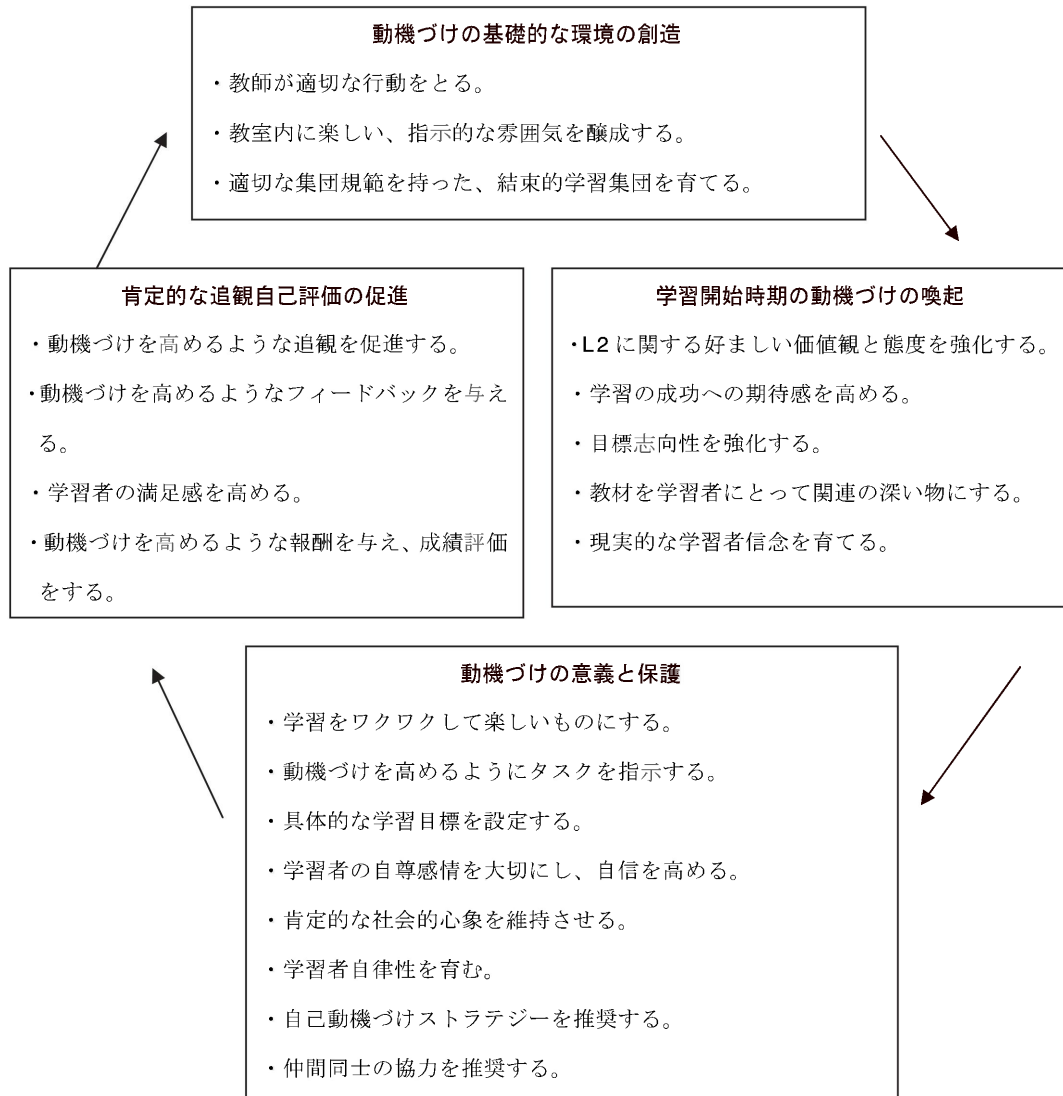


図1 動機づけを高める指導実践（ドルニエイ2005、p.32）

6.6 計画の実践と学生の反応

まず、教科書を理解させるためのプリントを作成し、それに従って授業を進めた。プリントの一番上には、そのユニットに出てくる単語の一覧を掲載し、その意味を辞書で調べることから始めさせた。辞書を持って来なければ減点、3回辞書を忘れた時点で授業後に面談するというルールを決め、実際に面談を行うと、それまで「辞書を持っていない」を理由に持参しなかった学生も、辞書を持参し、授業で活用するようになった。単語は毎週授業最後にテストを行うため、授業でしっかり覚えるという学習習慣が身に付いた。

教科書は海外旅行がテーマになっており、毎週その中のスキットをグループで暗記させ、

クラスメートの前で発表させた。英語で発表するためには正しい音で発音しなければならず、そのため単語の読み方について積極的に質問が出た。また、暗記することに学生は一生懸命になり、ふざけたり私語をする回数が著しく減少した。

グループの対立を避けるため、クラス全体ではなく、仲間同士でアクティビティを行わせることを試みた。また、プリントの問題も同じグループで教え合うといった共同学習を行うことで、効率よく取り組むことができた。

プリントは毎週回収し、筆者が全てに目を通した。そして、週ごとに色を変えたカラーペンで大きく○をつけ、様々な種類のスタンプを押し、特にがんばっていると思える内容には、スペシャルマークをつけた。また、全ての学生に励ましや褒めのコメントを書いて返却した。学生は教師がプリントに目を通すため、丁寧にプリントを仕上げ、全ての問題に解答するようになり、日を追うごとに熱心に取り組むようになった。またカラーペンの色やスタンプに興味を持ち、教師のコメントも楽しみにして、プリントの返却をまだかと待つようになった。返却されると、すぐにスペシャルマークが書かれているかを確認することから、毎週そのマークがもらえること、つまり筆者が学生の取り組みを評価することを期待してプリントに取り組んでいることが伺えた。

授業では、自発的に手を挙げて発言する回数が増え、教師に自分を認めてもらいたいという学生の「他者受容感」が強く感じられた。

6.7 結果および仮説の検証

アクション・リサーチの結果を検証するため、最終授業で学生にアンケートを実施した(表3、図2・3)。この結果をもとに仮説の検証を行う。

表3 授業についてのアンケート (n=24)

	%		
	はい	いいえ	どちらでもない
①教科書を理解するためのプリントはわかりやすかった	95.8	0.0	4.2
②教科書を理解するためのプリントにまじめに取り組めた	95.8	0.0	4.2
③毎週授業最後に行う単語テストはやればできるという達成感を味わえた	75.0	4.2	20.8
④グループで英語を覚えて発表することを繰り返すことで、英語を話すことに自信がついた	29.2	33.3	37.5
⑤プリントに教師が花マルやコメントを書くことで、教師に励まされやる気が出た	75.0	4.2	20.8
⑥教師はスポーツ生を理解していると思う	95.8	0.0	4.2

質問①、②の結果より、学生たちは筆者の作ったプリントにより、授業を理解し、それにまじめに取り組んだことが伺える。これにより仮説1は実証された。質問③の結果を見ると、単語テストにより達成感を味わった学生は75%であるが、達成感を味わわなかった

のはわずか4.2%であり、仮説2を否定することはできない。質問④の結果より、毎週英語を発表することを繰り返し行っても、約70%の学生は英語を話すことに自信を持ってはおらず、仮説3は実証されなかった。質問⑤、⑥より、教師の褒めやスポーツ学生への理解が学生の学習意欲を向上させたことが伺え、仮説4についても実証されたと言えよう。

図2、3は4月と7月に行ったアンケート結果の比較である。授業改善をすることにより、学生の英語苦手意識が軽減され、英語に興味を持ちだしたことが伺える。また、質問⑦として、授業の楽しさを聞いたところ、91%の学生がこの授業が楽しかったとしており、楽しくなかったは0であった。

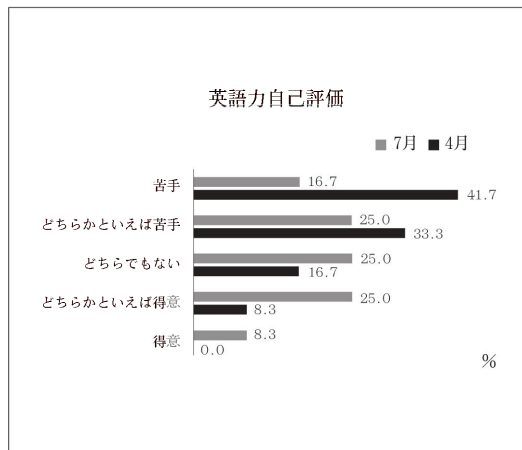


図2

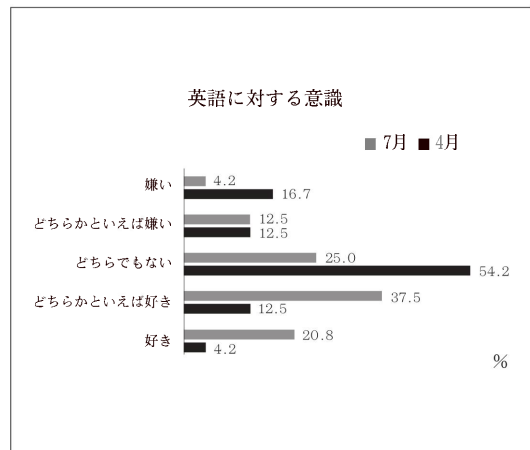


図3

自由記述項目では「この授業で大変だったこと」に対して30%の学生が「英語を覚えて発表すること」とし、その理由を「英語が苦手なのでなかなか覚えられなかった」を挙げている。「この授業で良かったこと」に対しては約60%が「楽しく英語を学べた」ことを挙げ、それ以外にも「わかりやすかった」、「仲間と一緒にできた」といった意見があった。「この授業で改善すべきところ」については、90%以上が「なし」と答え、改善すべきとした10%の意見については、授業内容には関係のないものであった。

ここで学生の授業の感想を以下にまとめる。

- 英語の歌を聞いたり、絵を描いたり、今まで受けたことのない英語の授業で、英語は嫌いだが、授業は楽しかった。
- 英語が苦手でも、絵やゲームなどでわかりやすく説明してくれるのが良かった。
- グループで授業を進めることが多かったので、仲間との絆が深まって良かった。
- 授業が堅苦しくなく、楽しみながら受講できた。
- 楽しい授業で「大学だ」と実感した。

- 暖かい雰囲気の授業だった。
- 授業はわかりやすく楽しかった。
- 英語をしっかりと勉強しようと思うことができ、英語力が上がったと思う。
- 英語が好きになった。先生ありがとう。
- 来年も Communication English Sports 2 を受講する。
- 英語が嫌いで全くわからないが、この授業はやりきれたと思う。
- 先生がスポーツ生を理解してくれていて良かった。
- うるさくして叱られたことがあるが、そのおかげで授業に集中できるようになった。
- 厳しく注意されることもあったが、楽しかった。
- とにかく楽しかった。

筆者の授業観察では、回数を重ねるごとに、「次は何をするのか」といった学生の期待感の高まりが感じられた。開講当初は学生を何とか授業に参加させようと、強制的な働きかけを行ったが、授業改善により、学生が自発的に筆者に指示を仰ぐという積極的な姿勢が見えるようになった。また、授業が半期で終了することについては非常に残念であるという声が多く聞かれ、教師と学生の間に信頼関係が構築されたことを実感した。

7. 考 察

AR を行い、授業を内省し指導法を見直すことで、学生の学習姿勢を大きく改善することができた。授業が分かりやすくなったことで、「自分にもできる」を実感し、その日の課題にしっかり取り組むようになり、また、動機づけを高めるフィードバックを教師が十分与えたことにより他者受容感が得られ、学習意欲向上とともに、教師への信頼感が増したと言える。しかし、「英語を話す」ことにおいて、根強い苦手意識は容易に払拭することができず、今後の課題として検討して行かなければならない。

三上（2010）は教師の授業に対する内省を以下のように述べている。

どの教員も、授業時間、学習者、教材などの様々な要素を考慮し、実施可能で最も効果的であると考えられる活動を積極的に取り入れながら、日常の授業を計画実践しているでしょう。しかし、そうした活動を取り入れることによって、本当に期待通りの成果が得られているのかと自分に問いただしてみると、その回答に詰まってしまうことも多いのではないのでしょうか。例えば、日常、何の疑問も持たずに行っている指導手順というのは、実は過去に自分が受けた授業の指導手順と変わらなかったり、また、自分が好む学習方法を生徒に一方的に押し付けることになっていたりしてはいないのでしょうか。それから、生徒の意見や考えを無視しているわけではないとしても、それ

らを十分に把握し、日常の授業の中にどれだけ反映させることができているでしょうか。自分の授業を振り返ってみると、それまで気づかなかった多くのことを発見することができますが、実は教員にとって、自分の授業の現状や効果をしっかり見つめ直すことは、簡単なようでとても難しいことのようにです。(p. 8)

確かに、開講当初は昨年と同じように授業を進めることが、学生にとって最も良い方法であると一方的に考えていた。津田(2007)の言うように、ARの方法を採用することにより、自分の授業をより客観的に把握し、授業をより興味深く、個々の学生に応じた指導を工夫することができた。この授業の準備、プリントの添削、コメント記入などは、他の授業とは比較できぬほど時間を要したが、それに比例するだけ熱意をもって学生に向き合い、学生から学ぶことも多かった。半期ではあったが、わかりやすく一生懸命取り組めた授業により、学生が意欲だけでなく、英語力も向上させたと信じている。今後も、スポーツ推薦入学生の積極的な学習姿勢構築と英語力向上のため、授業を内省しながらより効果的な指導を行っていきたい。

付 記

本稿は2010年度日本リメディアル教育学会第6回全国大会における口頭発表に基づき、加筆・修正した論考である。

参 照 文 献

- Lafaye, E. B. (2007). Asking the Writing Question? Action Research in the Creative Writing Class. *Tokyo Gakuen University Bulletin*, 12, 109-119.
- 上田敦子・駒井一仁・奥田利栄子・佐々木美帆 (2006). 「アクション・リサーチ—茨城大学総合英語1における指導—」『茨城大学人文学部紀要』第19号：143-156.
- 小野瀬正人 (2004). 「生徒と教師を元気にする心理学とは」『英語教育』11月号：8-10.
- 佐野正之 (2005). 『はじめてのアクション・リサーチ』東京：大修館書店.
- 関田信生 (2003). 「英語授業におけるインタラクシヨンの変化—アクション・リサーチによる分析から」『東海大学紀要』第11号：33-49.
- 田中誠 (2007). 「授業改善のためのアクション・リサーチ」『長崎国際大学論叢』第7巻：105-113.
- 都築幸恵 (2004). 「生徒に自信を持たせる方法」『英語教育』11月号：11-13.
- ドルニェイ・ゾルダン (2005). 『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』東京：大修館書店.

- 牧野眞貴 (2010 a). 「英語苦手意識を克服させる授業デザイン—スポーツ学生を対象として—」『近畿大学英語研究会紀要』第6号：125-138.
- 牧野眞貴 (2010 b). 「リスニング意欲向上のためのアクション・リサーチ—洋楽をウォーミング・アップにして—」『リメディアル教育研究』第5巻第2号：81-85.
- 三上明洋 (2006). 「英語教員研修におけるメンタリングの活用について」『近畿大学語学教育部紀要』第6巻2号：35-52.
- 三上明洋 (2010). 『ワークシートを活用した実践アクション・リサーチ』東京：大修館書店.